

金壽卿



Ким Сугён



김수경




北に渡った言語学者

キム スギョン

# 金壽卿の再照明

板垣 竜太、コヨンジン〔編〕

 同志社コリア研究センター

# | 目次 |

凡例

はじめに ————— 板垣 竜太 1

## ● 基調講演

1 父、金壽卿 ————— 金 惠英・金 泰成 7

## 第1部 北朝鮮の言語学・言語政策と金壽卿

2 北朝鮮の言語学史をどうみるか ————— 金 河秀 37

3 国語学史の観点から見た金壽卿 ————— 崔 炅鳳 52

## 第2部 金壽卿の国際的な照明

4 金壽卿の朝鮮語研究と日本 ————— 板垣 竜太 81  
— 植民地、解放、越北 —

5 金壽卿 [1989] から読む  
韓国歴史比較言語学の一様相 ————— コ ヨンジョン 138

6 旧ソ連言語学と金壽卿 ————— 趙 義成 156

7 金壽卿と中国の朝鮮語学 ————— 崔 義秀 173

## 附録

寄稿 私の心から尊敬する師匠、金壽卿先生	崔 應九	195
金壽卿年譜		198
金壽卿著作目録		208
著者・翻訳者プロフィール		220

## 6 旧ソ連言語学と金壽卿

チョ ウイ ソン  
趙 義 成

### 0. はじめに

本稿の目的は、朝鮮民主主義人民共和国（以下「共和国」とする）の朝鮮語学において、旧ソ連言語学のいかなる影響があったのかについて、とりわけ政治・思想的な側面と文法論的な側面に関して考察することである。

朝鮮解放後の38度線以北地域（以下「以北」とする）では、南北分断が進む中で38度線以南と別個の形で朝鮮語研究が進められていく。ソ連占領を受けて以北ではソ連言語学が流入し、これに少なからぬ影響を受けた朝鮮語研究が行われた。本稿の大きな流れとしては、マール主義と呼ばれるソ連言語学の風潮とそれを受容する以北の言語学界の様子を観察し、金壽卿がそれにどう関わったのかを見る。

次に、文法論における金壽卿の役割について、1949年刊行の『朝鮮語文法』（以下『49年文法』とする）、および1960年刊行の『朝鮮語文法1』（以下『60年文法』とする）を中心に考察する。文法論に関して具体的には、二大部門である形態論と統辞論について、それぞれ1つの問題に焦点を当てて考察する。形態論に関しては助詞の扱いについて見る。周知のとおりロシア語

---

<sup>1</sup> 『朝鮮語文法1』は音論・形態論が収録されており、その3年後の1963年に統辞論を扱った『朝鮮語文法2』が刊行された。ただし、金壽卿は『朝鮮語文法1』にのみ関与し、『朝鮮語文法2』には関与していないと見られるので〔金榮晃，権スンモ 1996：368，407〕、本稿では『朝鮮語文法2』については直接的には分析の対象としない。

は屈折語であるため、膠着語に属する朝鮮語にあるような助詞というものがない。ソ連言語学で直接的に扱われることのない助詞について、以北でどのように扱われたかは興味深いものがある。統辞論については単語結合の扱いを考察する。単語結合という文法単位はロシア言語学で独自に設定された単位であり、一般に西欧の言語学ではあまり扱われない。このようになじみのない文法単位を以北でどのように受け入れ、それを朝鮮語に適用したかを本稿で概観する。

## 1. 朝鮮解放直後の朝鮮語研究と金壽卿

### 1-1. ソ連言語学とマール主義

第2次世界大戦以前のソ連言語学界では N. Ja. マール (Н. Я. Марр, 1864-1934) の理論すなわちマール主義が「マルクス主義言語学」として、絶対的な地位にあった。彼はヤフェト理論という言語の一元発生説を唱え、またマルクス主義を標榜してからは、言語は上部構造であり、階級的なものであると主張した。ヤフェト理論は、あらゆる言語のあらゆる単語は「sal, ber, jon, rosh」という4つの要素から発生したという説であり、比較歴史言語学を「ブルジョア言語学」であるとして攻撃した。

マール主義は彼の死後もソ連言語学界に強い影響を及ぼしていたが、1950年にスターリンが新聞『プラウダ』紙上で発表した論文（後に『マルクス主義と言語学の諸問題』としてまとめられた）により公式に批判・否定され、ソ連言語学はようやく正常な状態にもどることとなった。解放直後に以北にもたらされたソ連言語学は、そのようなマール主義に染まったものであった。

### 1-2. 朝鮮解放直後の以北の言語学界

植民地時代の朝鮮では、周時経学派チュンギョクの学者が中心となって1931年に結成

した朝鮮語学会が、朝鮮人による民間の朝鮮語研究団体として大きな役割を担った<sup>2</sup>。朝鮮語学会は解放後も38度線以南の地域において、引き続き朝鮮語研究団体、ハングル普及団体として中心的な役割を担っていった。

一方、以北では1947年2月5日に北朝鮮人民委員会の175号決定により朝鮮語文研究会が組織された。この組織が以北において言語政策および朝鮮語研究の中心的役割を担っていった。朝鮮語文研究会は、言語政策の面で1948年に朝鮮語新綴字の制定、1949年に朝鮮語研究雑誌『朝鮮語研究』の発行<sup>3</sup>、そして同じく1949年に規範文法『49年文法』を発表したことが大きな成果といえる。

### 1-3. 朝鮮語文研究会における金壽卿の活動と旧ソ連言語学

解放直後の時期、金壽卿の活動は朝鮮語文研究会から発行された書籍を通して知ることができる。朝鮮語文研究会が1949年から50年にかけて発行した雑誌『朝鮮語研究』において、金壽卿はソ連の言語学論文の翻訳をたびたび行なっている<sup>4</sup>。共和国の言語学界がソ連の言語学を受容することは衛星国としての公的な方針であり<sup>5</sup>、金壽卿の活動もその一環として見るべきであろう。上に見たように、この時期のソ連言語学界はマール主義の影響下にあったため、紹介された論文もほとんどがマール主義に関わつけられたものである<sup>6</sup>。

---

<sup>2</sup> 朝鮮語学会は1933年に朝鮮語綴字法統一案、1936年に査定した朝鮮語標準語集を作った。この正書法、標準語集は、その後の南北分断後もそれぞれに引き継がれていった。

<sup>3</sup> 菅野裕臣 [1997]によれば、1949年から1952年まで刊行されたという。

<sup>4</sup> 1949年4月号から1950年6月号までの11冊で、14編の旧ソ連の論文が翻訳紹介されているが、そのうち6編を金壽卿が担当している。

<sup>5</sup> 申亀鉉 [1949: 35]では共和国の言語学者の当面の課題として「先進的ソビエト言語学の経験と理論を我々の事業に活かす仕事をしなければならない」としている。

<sup>6</sup> 唯一、1950年6月号で紹介されたチェモダーノフの「イ・ヴェ・スターリンとソビエト言語学」だけはマールへの言及がないが、これはこの論文がスターリン称揚の論文であるからであろう。

マール主義が共和国に紹介される一方で、朝鮮語研究それ自体は至って常識的な言語学に基づいた研究活動であると言ってよい。例えば、『朝鮮語研究』1949年5月号に掲載された金壽卿の論文「竜飛御天歌に見える挿入字母の本質」を見ると、ソ連の文献のみならず日本語文献（小倉進平）、西欧文献（ラムステット、ソシュール）、朝鮮語文献（崔鉉培、梁柱東）などを渉猟しており、マールのヤフェト理論に見られるような突飛な論理展開は見られない。マール主義的にみれば「ブルジョア言語学的手法」と言われかねない論文が、研究雑誌に掲載されることが許される当時の共和国の状況を見る限り、マール主義に染まった旧ソ連言語学が共和国内に浸透していたとは言い難い。

そもそも、解放直後の時期にあつて、対人民政策の面では民族文字の普及が急を要する課題であつたであろうし、朝鮮語学界においては規範文法の作成、辞典編纂という基礎的な事業が急務であつた〔編集部 1949：135；申亀鉉 1949：36〕。このようにみると、この時期の共和国の言語学界は、マール主義に染まったソ連の理論が盛んに紹介されはしたが、それらは紹介の段階にとどまつており、マール主義は共和国に根ざすことがなかつたと推測される。マール主義は1950年にソ連本国で否定される。共和国も同時期に朝鮮戦争が勃発したため、マール主義はおのずから捨てられていくことになる。このような状況下にあつて、金壽卿はソ連言語学の紹介者であると同時に、旧来の伝統的な言語学の研究者という2つの側面をもって研究活動をしていたといえる。

#### 1-4. 『49年文法』の編纂と金壽卿の役割

『49年文法』【図1】は朝鮮戦争以前における総合的な文法研究の1つの集

---

<sup>7</sup> この論文は1947年にソウルの震檀学報に掲載された論文「竜飛御天歌挿入音考」が下地となっている。

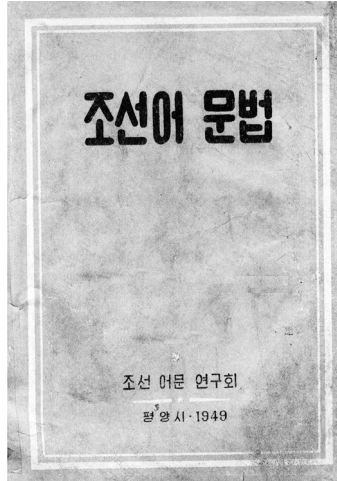


図1 朝鮮語文研究会『朝鮮語文法』（1949年）

大成である。この文法書は1948年10月組織された朝鮮語文研究会の文法編修分科委員会<sup>8</sup>が中心となり、草稿は金日成総合大学朝鮮語学講座を中心として作成され〔朝鮮語文研究會 1949〕、当時同講座の講座長をしていた金壽卿が主導的な役割を果たしていた〔金榮見, 権スンモ 1996 : 403〕。

『49年文法』は音論、形態論、統辞論の3つの分野から成り立っている。文法書に形態論、統辞論の他に音論を含める構成は、旧ソ連の文法書に見られる形式と同様である。『49年文法』も旧ソ連のそのような編纂手法を取り入れたものといえよう。内容的に見ても、音声学と音韻論を区分せず、音論として扱う点、造語論を形態論の中で扱う点、統辞論で単語結合を扱う点などは、当時のソ連言語学と軌を一にしている<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 李克魯、田蒙秀（委員長）、許翼、明月峰、金竜成、申龜鉉、洪起文、金炳濟、朴宗軾、朴俊泳、朴相竣、金壽卿の12名から成る。

<sup>9</sup> その後、旧ソ連では音声学と音韻論を別個に記述したり、形態論から造語論を独立して扱ったりしている。後の時代の共和国の文法書においても同様の傾向が見られる。



金壽卿が具体的に『49年文法』のどの部分を担当して執筆したかは明らかでない。これは、のちに見る『60年文法』についても同様である。したがって、本稿では『49年文法』の全体的な特徴を旧ソ連のものとは比べてみることにする。

### (1) 『49年文法』における助詞の扱い

形態論においてソ連言語学の理論を導入する際に、最も問題となるのは朝鮮語のいわゆる助詞の扱いである。周知のとおりロシア語は屈折語に属し、名詞の語形は語幹と語尾から成ると分析される。語幹、語尾はともに非自立的であり、両者はいずれも単独では現れることがない。それに対し、朝鮮語は膠着語であり、名詞は語彙的意味を担う自立的な部分(名詞の本体)に、文法的意味を担う非自立的な要素(いわゆる助詞)が後接することによって形づくられる。

解放以前の研究において、朝鮮語の助詞はまた「토 to」あるいは「토씨 tossi」と呼ばれ、文法的な関係を表す非自立的な品詞として扱われてきた。ここで重要なことは、助詞を品詞と見なしている点である。助詞を一品詞と見なすということは、すなわち助詞を単語と認定することを意味する。

さて、『49年文法』においても助詞という概念を認めてはいるが、従来の文法論と異なる点は、それまで同義の用語だった「助詞」と「토」をそれぞれ別個のものとして扱っている点である。『49年文法』において「助詞」は従来どおり一品詞すなわち単語であるが、「토」は単語ではなく単語を形づくる形態素であるとした。そして、「助詞」に所属せしめているものは、補助詞<sup>10</sup>と称されてきたもののみであり、格助詞と呼ばれてきたものは「助詞」ではなく「토」であるとした。

「助詞」と「토」のこうした区分の根拠としては、ソ連言語学の文法論

---

<sup>10</sup> 日本語文法の副助詞に相当する助詞の一群。

の影響が考えられる。ロシア語の名詞は語形変化を起こす。名詞の語形変化は語幹に後接する語尾がその役割を担い、格はこの語尾によって表される。ロシア語において語尾はあくまでも名詞の形態形成の形態素であり、それ自体は単語ではない。朝鮮語の格を表示する要素を「助詞」という単語と見ずに「ト」という形態形成の形態素と見たのは、ロシア語文法における名詞の格の捉え方を参考にしたものと考えられる。

一方の「助詞」については、ロシア語文法における「小詞」の概念と関連づけることが可能である。旧ソ連言語学においては一時期、単語を分類するにあたって「品詞」(части речи, parts of speech)と「小品詞」(частицы речи, particles of speech)を区分し<sup>11</sup>、小品詞の1つとして「小詞」(частица, particle)という単語の一群が設定された。小詞とは「完全に自立した現実的意味あるいは物質的意味を通常持たないが、他の単語、単語グループ、文の意味において主に補足的なニュアンスを加えたり、あるいはまたさまざまな種類の文法的(つまり、論理的、表現的)関係を表すのに役立つような単語のクラス」であるとしている[ヴィノグラードフ 1972 : 520]。『49年文法』では「助詞」を「自立的になりえずに、前にある語の意味をいろいろに助け、その意味に各種のニュアンスを付与する品詞である」としており、この定義が旧ソ連言語学における「小詞」の定義と相通ずるものがある。

## (2) 『49年文法』における単語結合の扱い

単語結合とはロシアの言語学で伝統的に扱われる文法的な単位である。第2次世界大戦以前の研究においては、単語結合は例えば「ある単語が別の単語に従属することによって表される文法的統一体を形づくる単語の連結」[シャフマトフ 1941 : 274]などと定義された。西欧の統辞論では文の構

---

<sup>11</sup> ヴィノグラードフ [1972] では名詞、形容詞、数詞、代名詞、副詞、状態範疇(述語)、動詞といった自立的な単語を「品詞」に、小詞、前置詞、接続詞といった非自立的な単語を「小品詞」に分類している。

造や成分などを扱うことが多いが、旧ソ連言語学において統辞論は文に関する理論と単語結合に関する理論という2つの柱から成っているほど、単語結合という単位は旧ソ連言語学において重要な位置を占めている。

『49年文法』では「語詞結合」という用語で単語結合が扱われて、「文法的に形態を兼ね備えた有意味的結合」(306ページ)と定義されている。「語詞結合」は「従属」と「並列」の2つの下位部類を持つが、これはソ連言語学における自立的単語結合と非自立的単語結合の区分に一致する。

「語詞結合」は統辞論第1章の「文の一般的知識」で「文の構成」とともに1節を割いて説明がなされていることから、『49年文法』においても重要な位置づけにあることがうかがわれる。しかしながら、総101ページある統辞論において「語詞結合」に割かれているページはわずか7ページであり、単語結合について詳細な分析は行われていない。それまでの文法研究が主に形態論を中心としてなされてきたこと、単語結合という概念にこれまで接する機会が少なかったことなどを総合して判断すると、朝鮮解放直後の短期間で単語結合論を十分に吸収することが困難だったのではないかと推測される。

## 2. 朝鮮戦争後の朝鮮語研究と金壽卿

### 2-1. 旧ソ連におけるマール主義の否定

今日『マルクス主義と言語学の諸問題』として知られているスターリンによるマール批判は、ソ連共産党機関紙『プラウダ』で行われた言語学者の紙上討論<sup>12</sup>を受けて、1950年6月20日付で掲載された「言語学におけるマルクス主義について」、およびそれに続く同志への回答から成る一連の

---

<sup>12</sup> スターリンの論文に先立ち、1950年5月9日から6月13日にかけて『プラウダ』紙上に週1回の連載で合計11編の言語学論文が発表された [田中克彦 2000 : 124-127]。

文章である。この中で、マール主義は欠陥だらけであること、マルクス主義的言語学ではないことが指摘され、紙上討論によりソビエト言語学界のアラクチェエフ的支配<sup>13</sup>が粉碎されたとした。この過程でマールに近い研究者であったメシチャニノフも失脚するが、「やがてマールを評価してはいたが正しい批判も怠らなかつたとして復活した」〔亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 1996 : 1512〕といい、「ソビエトにおける言語学批判も（中略）マルにとどめ、まだ生きているメシチャニノフにまでは及ばないように、しかも、その業績を否認しないようにとの配慮があらわれているように感じられる」〔田中克彦 2000 : 159〕という。

## 2-2. 金料奉の失脚と金壽卿への影響

ソ連におけるマール批判の開始とほぼ同時期に始まった朝鮮戦争により、研究活動が一時期停滞を余儀なくされたが、休戦後研究活動は再開され、朝鮮語綴字法の制定（1954年）、言語・文学の研究雑誌『朝鮮語文』の創刊（1956年）と、学界は活発な活動を見せた。このころにはすでにマール主義を否定したソ連言語学が共和国にもたらされていたと見られる。菅野裕臣〔1997〕によれば、朝鮮戦争中の1952年にヴィノグラードフらによる論文集「言語学に関するイ・ヴェ・スターリンの労作発表2周年記念論文集」が金壽卿によって翻訳、紹介され、金日成総合大学言語学講座からは1954年に「イ・ヴェ・スターリンの労作に照らし合わせてみた言語学の諸問題」が出されたという。

金壽卿自身もスターリンの『マルクス主義と言語学の諸問題』を引用しつつ、朝鮮語の語彙論を論じている〔金壽卿 1953〕。しかし、ここでは言語が上部構造か否か、言語は階級的か否かというマルクス主義的な問題には

---

<sup>13</sup> アラクチェエフとは帝政ロシアのアレクサンドル1世の寵臣で、専制的なボス支配を行った。

直接言及せず、スターリンが正常に戻した伝統的な言語学にのっとり語彙を論じている。

朝鮮戦争後の時期、共和国の言語学界ではきわめて重大な事件が起きている。共和国言語学界の主導的立場にあった金料奉<sup>キムドゥッボン</sup>の失脚である。『朝鮮語文』紙上では金料奉を批判する論文が掲載され〔著者不明 1958〕、それに続き6字母などの金料奉の業績はことごとく否定された【図2】。

金料奉批判のトーンはスターリンによるマール批判のトーンに類似する。すなわち、金料奉が朝鮮言語学界においてアラクチェエフの支配を敷いたというトーンであり、それに加えて朝鮮語学に固有な問題として金料奉が周時経を歪曲したことが言及された。また、この時期はスターリン批判が行われた後であったため、金料奉に対する個人崇拜も批判された。

このとき、金壽卿は金料奉の追従者という名目で、上述の『朝鮮語文』上の論文で公式に批判を受けている。とりわけ標的となったのが、金壽卿

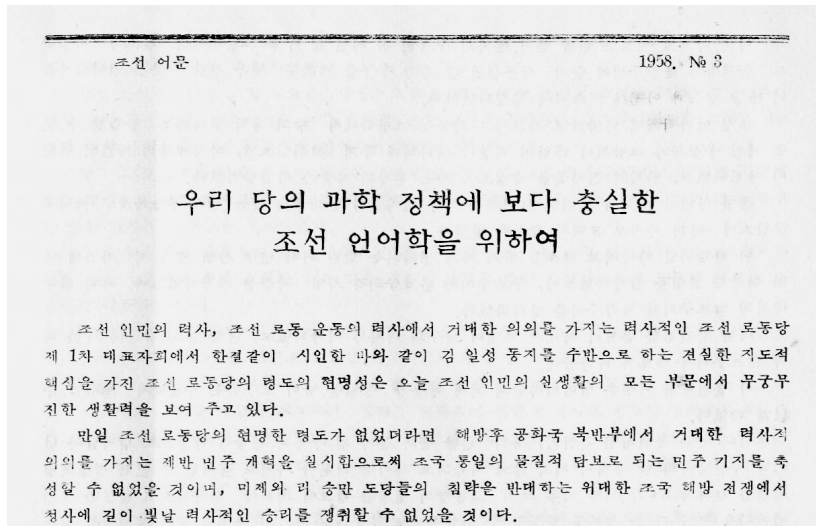


图2 金料奉批判論文（1958）

が雑誌『朝鮮語研究』1949年5月号に発表した論文「朝鮮語学者としての金料奉先生」であった。

京城帝大出身で、解放後に朝鮮共産党に入党、朝鮮語学会に入会した金壽卿と、周時経に師事し、延安派共産主義者として解放前から活動していた金料奉とでは、その経歴がまったく異なり師弟関係にもない。果たして金壽卿がどの程度金料奉に「追従」していたのかは定かでないが、金料奉の失脚が政治的な動機によるものであって言語学とは無関係であることを考えると、一種のスケープゴートとされたのかもしれない。しかしながら、批判論文で俎上にのせられた金壽卿に対しては「동무 dongmu」(…君)の称号が付けられており、金料奉の「反党反革命宗派分子」に対して金壽卿は「追従者」と受動的な立場に位置付けられていることから、金壽卿に対する批判はあらかじめ「逃げ道」の用意されていたもののようにも見える。マール批判の過程で同調者のメシチャニノフが失脚するも、その能力が認められてのちに復権したことを思うと、金壽卿もまた言語学者としての有能さを周囲から十分に理解されており、政治的な粛清劇とは一線を画して、完全な失脚をまぬかれたのかもしれない<sup>14</sup>。

### 2-3. 『60年文法』と金壽卿

1960年と1963年に刊行された『60年文法』は、共和国が朝鮮解放・朝鮮戦争の混乱期を経て、国家的に安定期に入った60年代初めに、科学院から出された最初の大がかりな規範文法書という点で、非常に重要な書籍である【図3】。1960年に刊行された第1巻(音論・形態論)は金壽卿、李瑾榮<sup>リグニョン</sup>が担当執筆し[金榮晃, 権スンモ編 1996: 369]、1963年に刊行された第2巻(統辞論)は鄭烈<sup>チョンリョル</sup>、宋瑞竜<sup>ソンソリョン</sup>が執筆した[金榮晃, 権スンモ編 1996: 407]。

---

<sup>14</sup> 菅野裕臣によるウェブページ「菅野裕臣の Autobiografia」(<http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/cgi-bin/hr.cgi?autobio/autobia-2.html>)は、「本来なら金料奉と共に処刑されかねなかったが、多くの弟子たちの嘆願によりそれは免れたという」と伝えている。

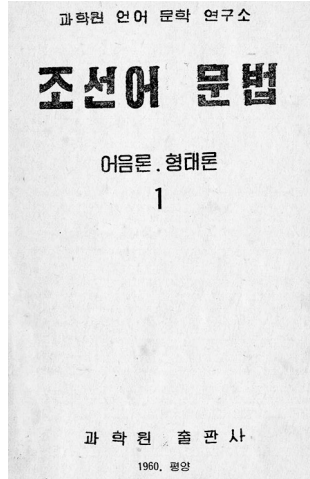


図3 科学院言語文学研究所『朝鮮語文法1』(1960年)

旧ソ連ではマール主義が公的に否定されたのちに、反マール派であった V. V. ヴィノグラードフ (V. V. Виноградов, 1895-1969) が中心となって1952年と1954年にアカデミー版『ロシア語文法』(以下『ソ連60年文法』とする)が刊行された。ソ連言語学がマール主義のくびきから解放されて初めて編纂された規範文法として、この『ソ連60年文法』は重要な意味を持つといえる。そして、この文法書が共和国の『60年文法』に大きな影響を与えたと推測される。

とりわけ金壽卿が担当したとされる第1巻は『ソ連60年文法』の影響力が強い。文書の形式として「§」記号を用いてセクションを区切る書式、「序論」と称して形態論の諸問題を広く検討する手法、音論において国際音声記号を用いず固有文字(補助記号付きハングル)で発音を表記する手法<sup>15</sup>などは、『ソ連60年文法』の手法をそのまま踏襲している。

<sup>15</sup>『ソ連60年文法』では補助記号付きのキリル文字によってロシア語の発音が示されている。

## (1) 『60年文法』における助詞の扱い

『49年文法』から『60年文法』への大きな変更点は、すべての「助詞」を認めなくなった点である。『49年文法』では補助詞のみを助詞としたが、『60年文法』では補助詞を含めすべての助詞類を、単語を構成する文法形態素である「ㇿ」とした。そして、同時に非自立的な品詞としての「助詞」は認めなくなった<sup>16</sup>。

その結果、名詞の文法的形態は格、用言形（指定詞の付いた形式）、補助詞の付いた形の3種を認めることになるのだが、格が文法範疇であるのに対し、用言形と補助詞の付いた形が文法範疇でなくて何者であるのか、あいまいなまま処理された<sup>17</sup>。しかしながら、文法形態素として語根に膠着する要素をことごとく「ㇿ」とするこのような見解は『60年文法』以降の共和国のあらゆる文法論に原則的に引き継がれていくほど、重要な見解となる。

## (2) 『60年文法』における単語結合の扱い

『60年文法』第2巻（統辞論編）は金壽卿が関与していないので、簡単に見ることにする。『60年文法』第2巻ではソ連言語学に見られるような「単語結合」という文法的統一体をそのまま認めず、「諸単語の文法的連結」というより広い概念を設定し、その下位範疇として「結合」、「接続」の2つを設定した。このうち「結合」がソ連言語学の「単語結合」に相当するものである。『60年文法』第2巻でこのような広い概念を導入した理由は、ソ連言語学の「単語結合」だけでは処理しきれない問題があったためであると見られる<sup>18</sup>。

---

<sup>16</sup> このことについて議論の余地があることは、形態論の「序論」に簡単に記述がなされている（129ページ）。

<sup>17</sup> その後、金鏞龜 [1989] では補助詞によって形づくられるものを「関連範疇」と呼び、格、数とともに体言の文法範疇と見なしている。

<sup>18</sup> これについての詳細は趙義成 [2001] 参照。



ところが、金壽卿が関与した『60年文法』第1巻（音論・形態論編）では、詳細な検討がなされているわけではないものの、ソ連言語学と同様の単語結合の概念を認めている<sup>19</sup>。『60年文法』第1巻発行から第2巻発行まで3年の間が空いており、また執筆者も異なる。単語結合の扱いについておそらく内部で盛んな議論があったものと推測されるが、金壽卿はよりソ連言語学に忠実な単語結合を想定していたものと思われる。

### 3. 主体思想擡頭とソ連言語学からの乖離

主体思想擡頭以降について、ごくごく簡略に記述する。

1960年代ごろより擡頭した主体思想は、共和国の言語学界にも影を落とすことになる<sup>20</sup>。とりわけ朝鮮語史においては、古代朝鮮における言語の単一性を主張する際に、金日成の教示が用いられた<sup>21</sup>。旧ソ連ではマールが歴史言語学において荒唐無稽とも言える論を展開し、それがスターリンによって否定されたが、共和国ではマールの亡霊が主体思想とともによみがえって朝鮮語史に憑りついたかのようである。金壽卿がこれらの論考にかかわった形跡は見られない。それは、彼が文法論、なにかんずく形態論を主として研究していたためと思われる。

文法論においては、ソ連言語学からの脱却が進んでいくように見える。

---

<sup>19</sup>『ソ連60年文法』第2巻（統辞論編）において単語結合は「2つ以上の自立語の連結により構成され、単一ではあるが分節された概念や表象を表すのに奉仕する文法的統一体」（『ソ連60年文法』第2巻第1分冊6ページ）と定義されている。これに対して共和国の『60年文法』第1巻では単語結合を「文中において2つ以上の実質的単語から成る文法的統一体」（『60年文法』第1巻4ページ）と定義している。

<sup>20</sup>朝鮮語の醇化運動などにも主体思想の影響は見られるが、本稿は旧ソ連言語学との関連を見るものであるので、ここでは言及しない。

<sup>21</sup>「もともとわが民族は数千年の長い歴史を通じて1つの文化と1つの言語をもって生きてきた単一民族です」（金日成『外国記者たちが提起した質問に対する答え』、朴正文 [1984] 『朝鮮語史研究論文集』から再引用）など。

形態論において、それまで品詞別に観察してきた「토」を、品詞にかかわらず同列に扱ったり、統辞論において単語結合を扱わずに文成分のみを論じるなどは、それまでの文法研究とはかなり様相が異なる。

## 4. おわりに

以上のような考察から、金壽卿が解放直後に旧ソ連言語学を積極的に紹介し、また朝鮮戦争後の共和国言語学界において、旧ソ連言語学の成果を取り入れた研究を行っていたことが分かった。旧ソ連言語学におけるマール主義は実質的に共和国に根付くことはなく、金壽卿自身もマール主義に染まることはなかったと見られる。結局のところ、金壽卿は旧ソ連言語学の「健全な」部分を朝鮮語学に取り込んでいったということができる。したがって、60年代までの共和国の言語学界が学問的に健全に活動を行うことができたのは、金壽卿をはじめとする研究者の真摯な学問的姿勢に拠るところが大きいといえよう。

## 参考文献

### (1) 朝鮮語文献

- 菅野裕臣 (간노 히로오미) [1997] “북한 문법학의 계보와 소련 언어학과의 관계 (1945 ~1990)”, 『東方學志』第98集, 서울: 延世大學校 國學研究院. [菅野裕臣 [1997] 「北朝鮮文法学の系譜とソ連言語学との関係」, 『東方学志』第98集]
- 고영근 편 [2000] 『북한 및 재외교민의 철자법 집성』, 북한 및 재외교민의 어문자료총서 (1), 서울: 역락출판사. [高永根編 [2000] 『北朝鮮および在外僑民の綴字法集成』 (1)]
- 편 [2001a] 『조선어 연구 1』, 북한 및 재외교민의 어문자료총서 (2), 서울: 역락출판사. [高永根編 [2001a] 『朝鮮語研究1』]
- 편 [2001b] 『조선어 연구 2』, 북한 및 재외교민의 어문자료총서 (3), 서울: 역락출판사. [高永根編 [2001b] 『朝鮮語研究2』]
- 편 [2001c] 『조선어 연구 3』, 북한 및 재외교민의 어문자료총서 (4), 서울: 역락출판사. [高永根編 [2001c] 『朝鮮語研究3』]

- 고영진 [2002] “북한 문법의 품사론의 변천 —‘품사’에서 ‘품사론’으로—”, 『애산 학보』 27, 서울 : 애산 학회. [高榮珍 [2002] 「北朝鮮文法の品詞論の変遷—「品詞」から「品詞論」へ—」]
- 金科奉 [1934] 『김더 조선말본』 [詳解朝鮮語文法], 京城 : 滙東書館.
- 김수경 [1953] “언어학의 문제들에 관한 이. 웨. 스타린의 로작에 비추어 본 조선어의 기본 어휘와 어휘 구성에 관하여”, 『조선 민주주의 인민 공화국 과학원 학보』 1953-2, 조선 민주주의 인민 공화국 과학원. [金壽卿 [1953] 「言語学の諸問題に関するイ・ヴェ・スターリンの著作に照らし合わせてみた朝鮮語の基本語彙と語彙構成について」]
- 김영환, 권승모 편 [1996] 『주체의 조선어 연구 50년사』, 평양 : 김일성종합대학 조선어문학부. [金榮晷, 權승모編 [1996] 『主体の朝鮮語研究50年史』]
- 김용구 [1989] 『조선어문법』, 평양 : 사회과학출판사. [金鏞龜 [1989] 『朝鮮語文法』]
- 김일성종합대학출판사 [1972] 『문화어문법규범』. [金日成綜合大學出版社 [1972] 『文化語文法規範』]
- 신구현 [1949] “조선 어문의 통일과 발전 사업에 있어서 우리들 조선어문 학자들의 당면과업”, 『조선어 연구』 8, 평양 : 조선어문 학회. [申龜鉉 [1949] 「朝鮮語文の統一と發展事業における我々朝鮮語文學者らの当面の課題」, 『朝鮮語研究』 8]
- 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 언어 문학 연구소 언어학 연구실 [1960] 『조선어 문법 1』, 東京 : 학우서방. [朝鮮民主主義人民共和國科學院言語文學研究所言語學研究室 [1960] 『朝鮮語文法1』]
- [1963] 『조선어 문법 2』, 평양 : 과학원 출판사. [朝鮮民主主義人民共和國科學院言語文學研究所言語學研究室 [1963] 『朝鮮語文法2』]
- 朝鮮語文研究會 [1949] 『朝鮮語文法』, 平壤 : 文化出版社.
- 조선어문 연구회 [1950] 『조선어 신철자법』. [朝鮮語文研究会 [1950] 『朝鮮語新綴字法』], 고영근 편 [2000] 所収
- 趙義成 [2001] “북한 단어결합론과 옛 소련 단어결합론 —60년 문법을 중심으로—” [北朝鮮單語結合論と旧ソ連單語結合論—60年文法を中心に—], 『國語學』 38, 서울 : 國語學會.
- 周時經 [1911] 『朝鮮語文法』, 京城 : 新舊書林.
- 崔鉉培 [1930] “朝鮮語의 品詞分類論”, 『朝鮮語文研究』, 延禧專門學校文科研究集第1輯, 京城 : 延禧專門學校出版部.
- [1934] 『중등 조선 말본』 [中等朝鮮語文法], 京城 : 東光堂書店.
- 편집부 [1949] “조선어문 연구회의 사업전망”, 『조선어 연구』 1, 평양 : 조선어문 연구회. [編集部 [1949] 「朝鮮語文研究会の事業展望」, 『朝鮮語研究』 1]
- Koncevich [1971] “蘇聯의 韓國語學” [ソ連の韓国語学], 『亞細亞研究』 XIV, No.2, 서울 : 高麗大學校亞細亞問題研究所. (菅野裕臣による Концевич, Л. Р. [1967] Корейский

язык, 《Советское языкознание за 50 лет》, Москва の朝鮮語訳と訳注)  
(著者不明) [1958] “우리 당의 과학 정책에 보다 충실한 조선 언어학을 위하여”, 『조선어문』 1958-3, 조선 민주주의 인민 공화국 과학원 출판사. [(著者不明) [1958] 「わが党の科学政策により忠実な朝鮮言語学のために」, 『朝鮮語文』 1958-3]

## (2) ロシア語文献

- Академия наук СССР [1952] 《Грамматика русского языка》, Том I, Издательство академия наук СССР, Москва. [ソ連科学アカデミー [1952] 『ロシア語文法』 第1巻, ソ連科学アカデミー出版社, モスクワ]
- [1954] 《Грамматика русского языка》, Том II, Издательство академия наук СССР, Москва. [ソ連科学アカデミー [1954] 『ロシア語文法』 第2巻, ソ連科学アカデミー出版社, モスクワ]
- Виноградов, В. В. [1972] 《Русский язык (грамматическое учение о слове)》, Издательство 《Высшая школа》, Москва. [ヴィノグラードフ [1972] 『ロシア語 (単語に関する文法学説)』, 「高等学校」出版社, モスクワ]
- Холодович, А. А. [1954] 《Очерк грамматики корейского языка》, Издательство литературы на иностранных языках, Москва. [ホロドビッチ [1954] 『朝鮮語文法概説』, 外国語文献出版社, モスクワ]
- Шахматов, А. А. [1941] 《Синтаксис русского языка》, Государственное учебно-педагогическое издательство наркомпроца РСФСР, Ленинград. シャフマトフ [1941] 『ロシア語統辞論』 ロシアソビエト連邦社会主義共和国教育人民委員部国立学習・教育出版社, レニングラード]

## (3) 日本語文献

- 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 [1996] 『言語学大辞典』 第6巻術語編, 東京: 三省堂.
- 桑野隆 [1979] 『ソ連言語理論小史』, 東京: 三一書房.
- 高峻石 [1988] 『北朝鮮現代史入門』, 東京: 批評社.
- 田中克彦 [2000] 『「スターリン言語学」精読』, 岩波現代文庫, 東京: 岩波書店.
- 村山七郎 [1951] 「マルのヤフェット理論とスターリン批判後のソ連言語学界」, 『民族学研究』 16-2, 東京: 日本民族学協会.

同志社コリア研究叢書2

北に渡った言語学者・金壽卿の再照明

---

発行日 2015年1月30日 初版

編者 いたがきりゆうた板垣 竜太・コヨンジン

発行者 同志社コリア研究センター

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL & FAX 075-251-3868

ホームページ <http://do-cks.net/index.html>

e-mail [rc-korea@mail.doshisha.ac.jp](mailto:rc-korea@mail.doshisha.ac.jp)

表紙装幀 大本 幸恵

印刷 (有)木村桂文社

---

ISBN 978-4-907634-01-8

本書の電子版は同志社大学学術リポジトリ (<http://library.doshisha.ac.jp/ir/>) で読めます。